

9/12 Tue.

第631回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.631 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
コンサートマスター
Concertmaster

スクロヴァチェフスキ
SKROWACZEWSKI
《生誕100年記念》

[休憩]
[Intermission]

ブルックナー
BRUCKNER

マリオ・ヴェンツァーゴ *-p.5*
MARIO VENZAGO
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

交響曲 (日本初演) [約36分] *-p.9*
Symphony (Japan Premiere)
I. Lento misterioso
II. Presto tenebroso
III. Adagio

交響曲 第4番 変ホ長調 〈ロマンティック〉
WAB104 (1878/80年稿・ノヴァーク版) [約70分] *-p.10*
Symphony No. 4, in E flat major, WAB104 "Romantic"
(1878/80 version, Nowak Edition)
I. Bewegt, nicht zu schnell
II. Andante quasi Allegretto
III. Scherzo: Bewegt
IV. Finale: Bewegt, doch nicht zu schnell

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））
独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック生命保険株式会社

※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

9/16 Sat.

第260回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.260 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

9/17 Sun.

第260回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.260 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

オネゲル
HONEGGER

オネゲル
HONEGGER

バルトーク
BARTÓK

[休憩]
[Intermission]

ベートーヴェン
BEETHOVEN

マリオ・ヴェンツァーゴ *-p.5*
MARIO VENZAGO
ヴェロニカ・エーベルレ *-p.7*
VERONIKA EBERLE
長原幸太
KOTA NAGAHARA

交響的運動 第1番〈パシフィック231〉 [約7分] *-p.12*
Symphonic Movement No. 1 "Pacific 231"

交響的運動 第2番〈ラグビー〉 [約8分] *-p.12*
Symphonic Movement No. 2 "Rugby"

ヴァイオリン協奏曲 第1番 BB 48a [約21分] *-p.14*
Violin Concerto No. 1, BB 48a
I. Andante sostenuto
II. Allegro giocoso

交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉 [約31分] *-p.15*
Symphony No. 5, in C minor, op. 67
I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro – IV. Allegro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

9/22 Fri.

第665回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.665 / Suntory Hall 19:00

9/24 Sun.

第128回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.128 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor

フルート
Flute

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

サン＝サーンス
SAINT-SAËNS

サン＝サーンス
SAINT-SAËNS

シャミナード
CHAMINADE

[休憩]
[Intermission]

バルトーク
BARTÓK

ギエドレ・シュレキエー *-p.6*
GIEDRĖ ŠLEKYTĖ

エマニュエル・パユ *-p.7*
EMMANUEL PAHUD

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

幻想序曲〈ロメオとジュリエット〉 [約19分] *-p.17*
Fantasy Overture "Romeo and Juliet"

オデレット 作品162 [約14分] *-p.18*
Odelette, op.162

ロマンス 変二長調 作品37 [約6分] *-p.18*
Romance in D flat major, op. 37

フルートと管弦楽のためのコンチェルティーノ
二長調 作品107 [約8分] *-p.19*
Flute Concertino in D major, op. 107

管弦楽のための協奏曲 [約36分] *-p.20*
Concerto for Orchestra
I. Introduzione
II. Giuoco delle coppie
III. Elegia
IV. Intermezzo interrotto
V. Finale

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））
独立行政法人日本芸術文化振興会（9/22）
協力：横浜みなとみらいホール（9/24）

指揮

マリオ・ヴェンツァーゴ

MARIO VENZAGO, Conductor



©読響

熟達のタクトで
音楽の本質に迫る
スイスの名匠

2021年11月に来日し、骨格まで浮き彫りにするような音楽作りで絶賛されたスイスの名匠が再客演。得意のブルックナー〈ロマンティック〉と、音楽史に燦然と輝くベートーヴェンの名作〈運命〉などを指揮する。

1948年チューリヒ生まれ。ウィーン国立音楽大学でハンス・スワロフスキーらに師事。ヴインタートゥール・ムジークコレギウム、ハイデルベルク市立劇場、プレーメン・ドイツ室内フィル、グラーツ歌劇場、バーゼル響、バスク国立管、インディアナポリス響、イェーテボリ響の首席指揮者や音楽監督などを歴任。2010年から14年までロイヤル・ノーザン・シンフォニアの首席指揮者を、10年から21年夏までベルン響の常任指揮者・芸術監督を務めた。

これまでにベルリン・フィル、ベルリン放送響、ボストン響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、フランス国立放送フィル、ロンドン・フィルなど世界各地の楽団に客演。オペラでは、バーゼル歌劇場、ベルリン・コーミッシェ・オーパーなどで活躍している。

ブルックナーの全交響曲を5楽団で振り分けたCPOレーベルの全集は、「史上最も刺激的で、そして示唆に富んだ斬新なブルックナー」と国際的に高い評価を受け、日本でも話題を呼んだ。ベルク、ノーノ、グバイドゥーリナら近現代音楽も得意とし、数多くの録音をリリースしている。

近年は作曲にも力を注いでおり、21年にはユン・ソーヤンをソリストに迎えベルン響とヴァイオリン協奏曲を世界初演。現在、2つのオペラを含む数作品の出版準備を進めている。

9/12
定期

9/16
土曜マチネー

9/17
日曜マチネー

Maestro

9/22
名曲

9/24
横浜マチネー

Maestro

指揮

ギエドレ・シュレキータ

GIEDRĖ ŠLEKYTĖ, Conductor

欧州で頭角を現す
リトアニアの気鋭



©Nikola Milatovic

ミュンヘン・フィルを指揮するなど欧州で注目を浴びる気鋭シュレキータが登場。バルトーク作品などを振り、その抜きん出た才能を開花させる。

1989年、旧ソ連のリトアニア生まれ。リトアニアで学んだ後に、グラーツ、ライプツィヒ、チューリヒなどで研鑽を積む。2015年マルコ国際指揮者コンクール入賞など、早くから頭角をあらわした。同年にはザルツブルク音楽祭の若手指揮者賞、18年にはインターナショナル・オペラ・アワードの年間最優秀新人賞にノミネートされるなど注目を浴びた。

16年から18年までクラゲンフルト市立劇場にて第1カペルマイスターを、21/22年シーズンからリンツ・ブルックナー管の首席客演指揮者を務めている。これまでにウィーン響、ロイヤル・ストックホルム・フィル、スウェーデン放送響、カメラータ・ザルツブルク、フランス放送フィル、リトアニア国立響など数多くの楽団に客演。今シーズンには、ベルン響、スロヴァキア・フィル、ローザンヌ室内管を指揮するなど活躍の場を広げている。

オペラの分野では、ベルリン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、フランクフルト歌劇場、ベルリン・コーミッシェ・オーパー、ライプツィヒ歌劇場、チューリヒ歌劇場などに登場し、高い評価を得ている。21年には代役として、東京二期会のモーツァルト〈魔笛〉で読響と初共演し好評を博した。23年シーズンには、ハンブルク歌劇場でマスネ〈マノン〉、デンマーク国立歌劇場でR. シュトラウス〈ナクソス島のアリアドネ〉などを振る。読響とは、21年に続き2度目の共演。



©Felix Broede

ヴァイオリン

ヴェロニカ・エーベルレ

VERONIKA EBERLE, Violin

世界の檯舞台で活躍するドイツの本格派ヴァイオリニスト。ドイツ南部のドナウヴェルト生まれ。ミュンヘン音楽大学にてアナ・チュマチェンコに師事。2003年イフラ・ニーマン国際コンクール優勝。06年に17歳でザルツブルク復活祭音楽祭にてラトル指揮ベルリン・フィルとベートーヴェンの協奏曲を共演し、注目を浴びた。ハイティンク、ティーレマン、ノリントン、ナガノら巨匠の指揮でロンドン響、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィル、フィラデルフィア管、ミュンヘン・フィル、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、バンベルク響などと共演している。使用楽器は日本音楽財団から貸与されたストラディヴァリウス 1700年製「ドラゴネッティ」。読響とは2015年以来、2度目の共演。

ベルリン・フィルの首席奏者を務め、ソロでも活躍する世界最高峰のフルート奏者。1970年ジュネーヴ生まれ。パリ国立高等音楽院でM. デボスト、A. マリオン、C. ラルデらに師事。同音楽院卒業後はバーゼルのA. ニコレの下で研鑽を積んだ。神戸国際フルートコンクール第1位、ジュネーヴ国際音楽コンクール第1位など受賞多数。93年ベルリン・フィルの首席奏者に就任。以来、同楽団の首席奏者およびソロ・フルーティストとして活動するほか、ソリストとしてバイエルン放送響、ロンドン響、フランス国立管などと共演。ワーナー・クラシックスと専属契約を結びCDをリリース、数々の賞を受賞している。フランス芸術文化勲章「シュヴァリエ」受章。英国王立音楽院名誉会員。読響とは、1997年の初共演以降、多数共演。



©Josef Fischmaller

フルート

エマニュエル・パユ

EMMANUEL PAHUD, Flute

9/16
土曜マチネー

9/17
日曜マチネー

Artist

9/22
名曲

9/24
横浜マチネー

Artist

スロヴァチエフスキ

交響曲（日本初演）

9/12
定期

Program Notes

今年10月、生誕100年を迎えるポーランド出身の音楽家、スタニスラフ・スロヴァチエフスキ（1923～2017）は、2007年から10年にかけて読響の常任指揮者を務めた。ベートーヴェンやブルックナーの演奏で日本の聴衆の耳に強烈な印象を残している。指揮者は一方で、作曲家としても大いに腕を振るった。演奏活動の足場をアメリカに据えてから、作曲の筆にも拍車がかかる。1960年代から2000年代にかけて、さまざまな編成の曲をコンスタントに書き続けた。

交響曲は2003年の作品。ミネソタ管弦楽団とミネソタ・コミッション・クラブがスロヴァチエフスキに委嘱した。3楽章からなる体裁は、留学先であるフランスの伝統を感じさせる。実際、ラヴェル演奏でも鳴らした指揮者は、ラヴェル風の管弦楽法を操る作曲家でもある。加えて、曲の作りのあちこちにブルックナーの影を感じさせるのも、大きな特徴のひとつ。スロヴァチエフスキは指揮においても作曲においても、ラヴェルやブルックナーに強いシンパシーを抱いていたことになる。

第1楽章 総休止を利用して場面転換を図る多段形式はブルックナーに倣^{なら}ったのだろう。1パートを細かく分ける繊細な声部の取り扱いがラヴェルに通じる。それにより音色のヴィヴィッドな変化を実現している。この変化もブルックナーのオルガン風音色転換に通底する書法だ。

第2楽章 弦楽器群によるホケトゥス（「しゃっくり」の意。各パートが交互に音の断片を弾くことで、全体としては一連の旋律を作り出すこと）に、管打楽器群が応答する。ヴァイオリンの独奏を経てホルン群がモットーを奏でると、これを各パートが受け渡していく。

第3楽章 ハープと打楽器から弦楽器、低音管楽器、高音管楽器と主役が移り変わる。それらは最終的に合流し音響の山場を作る。静けさを取り戻した後、独奏ヴァイオリンに導かれて、作品はその幕を下ろす。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2003年／初演：2003年10月2日、ミネアポリス／演奏時間：約36分

楽器編成／フルート3（ピッコロ、アルトフルート持替）、オーボエ3、クラリネット3（バスクラリネット、コントラバスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トムトム、グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、マリナーン、銅鑼、木魚、ボンゴ、ゴング、ベル）、ハープ、チェレスタ、ピアノ、弦五部

ブルックナー

交響曲 第4番 変ホ長調〈ロマンティック〉WAB104 (1878/80年稿・ノヴァーク版)

アントン・ブルックナー (1824～96) が、初めて管弦楽団による交響曲演奏を聴いたのは、オーストリア中北部リンツにおいて、16歳を過ぎてからだった。それにより作曲家は、自分の未来の特徴、つまり管弦楽をオルガンのように鳴らすスタイルにつながるヒントを得た。

裏面から言うと、ブルックナーにとって創作の糧となりうる材料は、リンツで出会った管弦楽曲、大聖堂、大オルガンしかなかった。その少ない材料を^うま^たず^ゆま^ず繰り合わせ、管弦楽付き教会音楽や交響曲に溶かし込んだところに、この作曲家のオリジナリティーがある。

たとえば、第4交響曲第4楽章 (第1稿) には5連符がさかんに顔を出す。半小節の中に8分音符4つと5連8分音符5つとが垂直に同居する。当然それはばらけた印象のアンサンブルになる。このずれは聖堂に響くオルガンの残響を模倣している。

こうした教会の響きは、当時の聴き手の耳に心地よく響いたようだ。1881年にウィーンで行われた第4交響曲の初演は、ブルックナーの作品としては珍しく成功した。すぐにドイツ語圏各地で再演され、88年にはニューヨークでも舞台に掛けられた。上演自体はここまで成功しながら、楽譜の出版交渉は難航。売れ行きが見込めなければ、版元は出版に二の足を踏む。89年になり、やっとウィーンのアールベルト・グートマン社が手を挙げ、初版を発行する運びとなった。

出版のいきさつと話は前後するが、作曲の経緯は次の通り。ブルックナーは1874年の初めに第4交響曲に着手し、その年の11月に第1稿を書き上げた。ところがこの第1稿を、演奏することなく放置する。77年に改訂を決意、翌78年に作業を始めた。同年12月には改訂を終え、第2稿を完成させる。さらに79年から80年にかけて第4楽章に手を入れ、第3稿をなす。ブルックナーは、この第2稿 (第1・2・3楽章) と第3稿 (第4楽章) とで「最新の改訂」とした。今日、第4交響曲と呼ばれているのは、この「最新の改訂」である。

「ロマンティッシェ romantische (独)」なる言葉は、作曲家自身によって第1稿の時点から用いられている。また、ブルックナーは第4交響曲のところどころに、「教

会の塔で朝を告げるラッパが鳴る」「寝覚めの街の門が開き、騎士が馬で表へ駆け出す」「ロマンティズムの白鳥の歌」といった詩的な解説も加えている。この曲に同時代の交響詩のような標題性が顕在化しているわけではない。一方で上記のようなイメージの肥大化した先に、ブルックナーの音楽があらわれているというのも確かなことだ。

第1楽章、「長長短長」とホルンの奏でる第1主題が重要。朝もやから現れてきたような響きだが、長短のメリハリの効いた韻律のおかげでくっきりと像を結ぶ。ヴァイオリンによる第2主題の「短短長」は、第1主題と同じくその語尾は「長」だが、柔らかさがずいぶん違う。このコントラストは決定的だ。この第2主題の柔和な表情のおかげで、第1主題のどこか決然とした印象が強まる。

さて、変ホ長調は管弦楽にとって絶妙の調だ。雄大な楽想を示すのによく用いられる。というのも、この調の第3音 (主和音の長3度音) がヴァイオリンの最低音 (G線の開放弦) と一致しているから。もっとも数の多いヴァイオリンの一群が、開放弦でこの音を豪壮に鳴らす。こうした楽器法が、作品の迫力作りに一役買っている。

第2楽章は五つの部分からなる。行進曲風のAとヴィオラ主体の幻想的なBとが交互に現れる。Aはそのたびに変奏され、3度目の登場でとりわけ大規模に。スケルツォの**第3楽章**は、作曲者によれば「狩の音楽」。トリオはオーストリアの舞曲レントラーだ。

第4楽章の冒頭からしばらくの間、下行音型が形を変えずにその音価だけを短くしていく。するとエネルギーが徐々に堆積していくかのように感じられる。作曲家はそれを頂点で爆発させる。単純だが効果的な書法。こうしたエネルギーの堆積と爆発こそが、楽章全体を貫く背骨といってよい。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1874年 (初稿)、1878～80年 (改訂) / 初演：1881年2月20日、ウィーン / 演奏時間：約70分
楽器編成 / フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

9/16

土曜マチネー

9/17

日曜マチネー

Program Notes

オネゲル

交響的運動 第1番〈パシフィック231〉

交響的運動 第2番〈ラグビー〉

20世紀初頭に活躍した「フランス6人組」の作曲家のひとりとしてされるアルテュール・オネゲル（1892～1955）は、スイス人の両親のもと、フランス北西部のセーヌ川河口に位置するル・アーヴルに生まれた。ちなみにル・アーヴルの対岸はオンフルールで、エリック・サティの出身地だ。オネゲルはフランスとスイスの2つの国籍を持ち、音楽好きだった母親の手ほどきで幼少期から作曲を試みていたという。1911年にパリ音楽院に入学したが、14年に勃発した第一次世界大戦の時はスイス軍に入隊した。

21年にオネゲルはルネ・モラが書いた劇的詩篇〈ダヴィデ王〉の付随音楽で注目される。それは23年に交響的詩篇〈ダヴィデ王〉として改訂され、オラトリオ作品として演奏されるようになった。オネゲルの代表作としては劇的オラトリオ〈火刑台上のジャンヌ・ダルク〉（ポール・クローデル台本、38年初演、電子楽器のオンド・マルトノが使われる）もよく取り上げられるが、他に現在でも演奏機会が多いのは「交響曲第3番〈典礼風〉」（46年初演）、そしてこの〈交響的運動〉だ。

フランス語で表記すると「Mouvement Symphonique」となるこの〈交響的運動〉は全3曲あり、**第1番〈パシフィック231〉**は23年に書かれた。「蒸気機関車を熱愛していた」と作曲家自身が語っているが、オネゲルは蒸気機関車の走る姿を音楽的に描写したわけではなく、巨大な蒸気機関車が疾走するそのスピード感や重量感を、より客観的に観察して、音楽で表現しようと試みた。音楽が書かれてから、この〈パシフィック231〉というタイトルを思い付いたが、〈パシフィック231〉は蒸気機関車の型式名ではなく、「パシフィック型」と呼ばれる機関車の車軸配置（2軸先輪、3軸動輪、1軸従輪）を意味する。音楽は序奏部（モデル）から始まり、全体では8部に分かれる主部（リトミック）が続いて、緻密なテンポの変化と音符の分割によって、そのスピード感と重量感が表現されていく。24年、セルゲイ・クーセヴィツキー指揮のパリ・オペラ座管弦楽団によって初演され、大成功を収めた。その後、ヨーロッパ各国でも取り上げられ、オネゲルの名を高めた。作品自体はスイスの指揮者であるエルネスト・アンセルメに献呈された。

第2番〈ラグビー〉は1928年の作品。第1番の成功を受けて、オネゲルは「フッ

トボール」あるいは「ラグビー」というタイトルを持つ管弦楽曲を構想していたという。オネゲル自身はサッカーやテニス、水泳などを経験していたというが、あえてテーマを「ラグビー」にしたのは、ラグビーというスポーツの中の「スクラム」や「パス」の要素が、音楽に結びつくからだという。ロンド形式で書かれた音楽は、そのテーマを様々な楽器が「パス」して繋ぎ、次第に明らかになっていくふたつのテーマの対立がポリフォニックな「スクラム」を表現する。折しも、フランスはラグビー・ワールドカップのホスト国。テレビ放送をご覧になる方は、このオネゲルの管弦楽曲と一緒に聴いてみてはいかがだろうか？ 初演は28年にエルネスト・アンセルメ指揮、パリ交響楽団（1938年まで存在）第1回定期演奏会で初演された。

〈交響的運動〉のもう1曲はタイトル無しの「第3番」で、これは33年に書かれ、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーに献呈されたが、現在ではあまり演奏機会に恵まれていない。録音はフルトヴェングラー指揮（1952年録音）のものを含めて数種類、聴くことが出来る。ちなみにオネゲルはアベル・ガンズ監督による傑作無声映画『ナポレオン』（27年）の音楽も担当しているが、20世紀初頭は新しいメディアの出現、イタリアの「未来派」に見られる新しいテクノロジーへの関心など、作曲家が変化を指向した時代でもあった。

〈片桐卓也 音楽ライター〉

【交響的運動 第1番〈パシフィック231〉】

作曲：1923年／初演：1924年5月8日、パリ・オペラ座（現在のガルニエ）／演奏時間：約7分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、打楽器（大太鼓、中太鼓、シンバル、銅鑼）、弦五部

【交響的運動 第2番〈ラグビー〉】

作曲：1928年／初演：1928年10月19日、パリ（会場不明）／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、弦五部

9/16

土曜マチネー

9/17

日曜マチネー

Program Notes

9/16

土曜マチネー

9/17

日曜マチネー

Program Notes

バルトーク

ヴァイオリン協奏曲 第1番 BB 48a

ハンガリーの作曲家バルトーク・ペラ（1881～1945）の初期の傑作として知られるヴァイオリン協奏曲第1番だが、実は初演されたのは1958年のこと。というのも、この作品を献呈された女性ヴァイオリニスト、シュテフィ・ゲイエル（1888～1956）が生涯、秘匿していたからである。彼女はバルトークの一方的な気持ちに好感を持たず、楽譜を封印してしまった。

ゲイエルはブダペスト生まれで、幼い頃からそのヴァイオリンの才能を開花させた。名教師フバイ・イェナーのもとで学んでいた時代、若い音楽学生のアイドルの存在であったと言われ、バルトークもその崇拝者のひとりだった。

彼女に献呈するために、バルトークは1907～08年にかけてヴァイオリン協奏曲を作曲したが、ゲイエルが演奏することはなかった。そして彼女の死後、その協奏曲のコピーがスイスの名指揮者パウル・ザッハー（1906～99）の手に渡り、1958年にザッハー指揮、ハンスハインツ・シュネーベルガーのヴァイオリン独奏により初演された。作曲からほぼ50年後のことだ。それによって、すでに初演されていたヴァイオリン協奏曲第2番（39年初演）に先行する作品として、この作品がヴァイオリン協奏曲第1番と呼ばれるようになった。

全体は2つの楽章から構成される。**第1楽章**はアンダンテ・ソステヌート。甘美な、と言いたいヴァイオリンの独奏から始まり、弦楽合奏風な部分が続き、次第に楽器が増えていく。その響きの中には、20世紀初頭の不安定な世相を感じさせるような暗さも潜んでいる。

第2楽章はアレグロ・ジョコソ。一転して、激しさを持った楽章である。ソロ・ヴァイオリンは常に前進する意欲を感じさせながら、オーケストラ全体を率いていく。劇的な高まりを見せた後、再びヴァイオリンに甘美なメロディが戻って来て、最後はダイナミックに終わる。

〈片桐卓也 音楽ライター〉

作曲：1907～08年／初演：1958年5月30日、バーゼル／演奏時間：約21分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2（バスクラリネット持替）、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、トライアングル）、ハープ2、弦五部、独奏ヴァイオリン

ベートーヴェン

交響曲 第5番 ハ短調 作品67〈運命〉

フランスで市民革命が起き、その後ナポレオンが登場してヨーロッパ中に大きな旋風を巻き起こした18世紀末から19世紀初頭の激動の時代に、作曲家ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）も生きていた。ナポレオンへの共感から書き始められた第3番〈英雄〉が完成したのは1804年で、その完成後すぐの時期のスケッチ帳（ベートーヴェンが様々な音楽的アイディアなどを書き留めていた日記帳のようなもの）に、交響曲第5番の元となるモチーフなどが書き留められているという。しかし、本格的にその作曲に着手したのは1807年からで、08年をはじめに完成した。同時期に構想を練っていた交響曲第6番〈田園〉とともに、2つの交響曲は08年12月22日にウィーンのアン・デア・ウィーン劇場におけるベートーヴェン主催のコンサートで初演された。

有名な〈運命〉というサブタイトルはベートーヴェン自身が命名したものではなく、ベートーヴェンの身の回りの世話をしていた音楽家シンドラーの残したエピソードが元となっている。シンドラーが「この交響曲の最初の4つの音は何を表すのか」と質問し、ベートーヴェンは「運命はこのような扉を叩く」と答えたといわれるが、現在ではその信憑性が疑われている。ちなみに〈運命〉のサブタイトルは欧米の演奏会では見かけない。

4つの楽章からなるこの交響曲第5番では、それまでの交響曲で使われていなかったトロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットという楽器を加え、音響的に新しい試みがなされた。第3楽章と第4楽章を繋げて演奏するアイディアも斬新だった。第1楽章の重苦しいハ短調から第4楽章の晴れやかなハ長調への展開もドラマティック。冒頭の4音から最後のフェルマータまで、隙のない構成感と音楽的な統一感を持つこの交響曲は、現在でも多くの聴衆に訴えかける魅力を放っている。

〈片桐卓也 音楽ライター〉

作曲：1807～08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

9/16

土曜マチネー

9/17

日曜マチネー

Program Notes

チャイコフスキー

幻想序曲〈ロメオとジュリエット〉

9/22
名曲

9/24
横浜マチネー

Program Notes

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）といえば、ロシアが生んだ最大の作曲家。しかし、1869年に幻想序曲〈ロメオとジュリエット〉を作曲したチャイコフスキーは、まだ29歳を迎える駆け出しの作曲家にすぎなかった。当時、ロシア音楽界で権勢を誇っていたのは、ロシア5人組の中心人物として知られるバラキレフ。年齢はわずか3歳しか違わないのだが、先輩格のバラキレフはチャイコフスキーに対してしばしば手厳しい師としてふるまった。チャイコフスキーにとって、バラキレフは決して心から共感できる人物ではなかったが、その権威を認めずにはいられない存在でもあった。

そんなバラキレフからの勧めにしたがって、チャイコフスキーはシェイクスピアの〈ロメオとジュリエット〉を題材とした管弦楽作品に取り組んだ。なかなか筆が進まないチャイコフスキーに対して、バラキレフは助言に加えて冒頭の4小節まで書いて送ってきたという。これにはチャイコフスキーも辟易^{へきえき}したようで、バラキレフに見せることなく曲を書き進めて、完成にこぎつける。できあがった作品に対して、バラキレフは「これまでで最高の出来ばえ」と称賛した。作品は1870年に初演されたが、バラキレフの意見を取り入れてすぐに改訂され、さらに80年にふたたび改訂されている。

曲はクラリネットとファゴットによる荘重で物悲しい序奏で開始される。コーラル風の曲想が修道僧口レンスを連想させる。やがて緊迫感を高め、叩きつけるような激しい主題とともに主部に入り、モンタギュー家とキャピュレット家の対立を表現する。対立の後に訪れるのはロメオとジュリエットの愛の場面。甘美な音楽^{つつ}が綴られる。ふたたび両家の争いが始まり、修道僧口レンスの主題や愛の主題を交錯させながら高潮し、最後はふたりの死を表現して悲痛に曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1869年、70年改訂、80年再改訂／初演：1870年3月16日、モスクワ／演奏時間：約19分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、ハープ、弦五部

9/22
名曲9/24
横浜マチネー

Program Notes

サン＝サーンス

オデレット 作品162 ロマンズ 変ニ長調 作品37

カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）の作曲家としての活動期間はきわめて長い。幼少期には「モーツァルトの再来」と評される早熟ぶりを見せる一方、86歳で世を去る最晩年まで作曲活動が続け、本人の言葉によれば「りんごの木がりんごを实らせるように」あらゆる分野に膨大な数の作品を残した。ともに独奏フルートと管弦楽のための作品ではあるが、〈オデレット〉は1920年、〈ロマンズ〉は1871年の作曲。両作の間には実に半世紀もの隔りがある。

〈オデレット〉とは「小さなオード（頌歌）」の意で、「抒情的小品」の訳題でも呼ばれる小品。ピアノ伴奏版で演奏されることが多く、管弦楽伴奏で聴く機会は貴重だろう。みずみずしく気取りのない主題が奏でられ、技巧的ではあっても、どこか枯れた味わいがあり、しみじみとした趣を醸し出す。本作品の翌年、サン＝サーンスはオーボエ、クラリネット、ファゴットそれぞれのためのソナタを書いて世を去るが、これら最晩年の木管楽器のためのソナタと一脈通じる性格を持っているといえるだろう。初演者は名奏者ガストン・ブランカール。サン＝サーンスは初演には立ち会えなかったが、翌年8月に生涯最後のリサイタルを開いた際、同じソリストにより〈オデレット〉が再演された。

〈ロマンズ〉が作曲されたのは1871年、普仏戦争の頃。当時の名奏者アメデ・ドゥ・フロエに献呈されたが、パリ・コミュンによる政情不安からパリでの初演が困難だったため、まずはバーデン・バーデンで初演され、翌年にポール・タファネルによりパリ初演が実現した。この曲もピアノ伴奏版で演奏される機会が多い。ゆったりとした序奏に続いて、独奏フルートが淡いノスタルジーを湛えた甘美な主題を奏でる。フルートと管弦楽との繊細な絡み合いが陰影豊かな表情を作り出し、あたかもオペラの一場面のような陶然とした楽想をくりひろげる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

【オデレット】作曲：1920年／初演：1920年9月、ディエップ／演奏時間：約14分
楽器編成／オーボエ2、ファゴット2、弦五部、独奏フルート

【ロマンズ】作曲：1871年／初演：1871年、バーデン・バーデン／演奏時間：約6分
楽器編成／オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏フルート

シャミナード

フルートと管弦楽のためのコンチェルティーノ ニ長調 作品107

セシル・シャミナード（1857～1944）は19世紀において職業作曲家として名声を獲得した数少ない女性のひとり。パリの裕福な一家に生まれ、ヴァイオリン愛好家の父とピアノと声乐を嗜む母親のもと、恵まれた環境でピアノと作曲の才能を育んだ。12歳の頃には一家と親交のあったビゼーから「小さなモーツァルト」と呼ばれていたという。家庭内で作曲家バンジャマン・ゴダールらから個人レッスンの形で教育を受けた。22歳でフランス国民音楽協会のメンバーとなり、サン＝サーンスやフランクらと並んで、シャミナードの作品が演奏されている。さらにシャミナードはサロン的なピアノ小品の作曲家としてアメリカで絶大な人気を獲得し、アメリカ・ツアーで自作を演奏し大成功を収めた。

ブルジョワ家庭に生まれた娘はいずれ結婚して家庭に入り、母となることが当然視される時代にあって、シャミナードは結婚にあたり慎重な選択をした。「才能に恵まれた女性は、その才能の価値を認め、保護してくれるだれかと結婚しなければならない。夫とは助け合うのであり、夫の利己主義的な嫉妬深い非難の対象になってはいけない」。そう考えたシャミナードは44歳で15歳年上の楽譜商と結婚し、キャリアを犠牲にすることなく別居婚を選択し、冬の一時期をふたりで別荘にて過ごした。子はおらず、不運にも結婚から5年後に夫は世を去った。

結婚の翌年、幸福だったであろう時期に書かれたのが〈フルートと管弦楽のためのコンチェルティーノ〉である。同年のパリ音楽院フルート科の修了コンクール課題曲として作曲された。作曲者によれば「フルートに課せられたあらゆる技巧が含まれた作品」。短い序奏に続いて独奏フルートが穏やかで平明な旋律を奏で、装飾的なパッセージを交えながらさまざまな表情をくりだす。独奏フルートのカデンツァを挟んだ後、冒頭主題が回帰し、華やかな終結部を迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1902年／初演：1902年、パリ／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハープ、弦五部、独奏フルート

9/22
名曲9/24
横浜マチネー

Program Notes

9/22
名曲

9/24
横浜マチナー

Program Notes

バルトーク 管弦楽のための協奏曲

〈管弦楽のための協奏曲〉という曲名は一見、不思議に思える。協奏曲でまず連想されるのは、ソリストが中央に位置し、その後ろでオーケストラが伴奏を務めるというスタイル。しかしバルトーク・ペラ（1881～1945）の〈管弦楽のための協奏曲〉には、そのような単独のソリストはいない。

というのも、この曲はオーケストラ自身のための協奏曲であり、バルトークによれば「単一の楽器または一群の楽器が、協奏的、独奏的に扱われる」ため。バロック時代の協奏曲には、たとえばバッハの〈ブランデンブルク協奏曲〉のように、複数の独奏楽器が交替でソロを務めるスタイルの作品が数多く書かれている。このように複数の独奏楽器がソロを担い、また独奏楽器群とオーケストラ全体が対比の妙を作り出すといった古くからの協奏曲のスタイルを、20世紀の大編成のオーケストラで換骨奪胎かんこつだつたいしたのがこの〈管弦楽のための協奏曲〉といえるだろう。

1940年、ナチスの台頭にともない、バルトークは祖国ハンガリーを離れ、アメリカに移住する。新天地で経済的にも健康面でも苦境に立たされたバルトークに対して、ボストン交響楽団音楽監督であったセルゲイ・クーセヴィツキーは新作を委嘱して、救いの手を差し伸べた。作品は1943年の夏、わずか2か月ほどで完成された。

第1楽章 序章 作曲者がたびたび書いた「夜の音楽」のムードで静かに開始され、活発な主部が続く。**第2楽章 対の遊び** ファゴット、オーボエ、クラリネット、フルート、トランペットがそれぞれ順に対になって登場し、おどけたパッセージを奏でる。中間部は金管楽器によるコラル。 **第3楽章 エレジー** 「夜の音楽」の作風で書かれた痛切な哀歌。 **第4楽章 中断された間奏曲** 中間部は米国初演をラジオで聴いたショスタコヴィチの交響曲第7番のパロディ。 **第5楽章 終曲** 短い導入にプレストのスリリングな主部が続ぎ、華麗なフィナーレを築きあげる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1943年、1945年改訂／初演：1944年12月1日、ボストン／演奏時間：約36分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼）、ハープ2、弦五部